琉游舎

アトリエ琉游舎だより 158号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2023年8月2日発行

甲虫 皂莢虫 角虫 鬼虫

カブトムシ　サイカチムシ　ツノムシ　オニムシ

○いずれもカブトムシの異名です。元々江戸時代はサイカチムシと呼ばれていたようです。理由は皂莢（さいかち）の木に住んでいる虫だからです。甲虫の幼虫サイカチマメゾウムシが種子に寄生して蛹を経て羽化し成虫の甲虫となり皂莢の樹液を吸って生きてるからです。

○甲虫の名前は昆虫の頭部の形態が武士の兜に似ていることから京都方面で呼ばれていたものが、いつの間にか正式名称になったようです。角虫は文字通り角をもった虫ということ。

○鬼虫という呼称に関しては私には異論があります。私の育った栃木県北部ではオニムシといえばクワガタムシを指します。子供のあこがれの虫で、夏休みにはオニムシ捕りに、男の子は雑木林のなかを探し回ったものです。もう忘れてしまいましたが、ノコギリクワガタやミヤマクワガタ等の角の部分の形状によって、それぞれ呼び名があり、子供たちはお互いが自分のオニムシを自慢し合って、戦わせていました。生息する木を知っている子供は英雄です。私は子供時代、その木を知らなかったので殆ど捕まえることはできませんでした。

○一方、カブトムシは容易に見つけることができました。朝晩に外灯の下に行けば必ず見つけることができたので、クワガタ（オニムシ）に比べれば遥かに価値の低い昆虫でした。

○昔はコリーナでも頻繁に見つけられたカブトムシを、今年はまだ一匹も目にしていません。枯れ草を積み上げた堆肥をひっくり返すとよくカブトムシの幼虫を見つけたものですが、近年はそれもありません。気候のせいか、幼虫の育つ環境が破壊されたのか分かりませんが、自然豊かなこの地も毎年注意深くみていくと生き物の生態が変化しています。気候や環境の変化で生息地を移動したのか、適応できずに滅びたのか、より強い生き物に駆逐されたのか、生物界で起こることはいずれ人間界でも起きるはず。戦争も環境破壊も人間自身が住む場所を破壊しているように見えます。人が破壊した人間界に次に生息する生き物は何でしょう。

お盆施餓鬼法要　8月13日（日）10時半　琉游舎にて

7・8月スケジュール

月	火	水				
			3 映画会 お休み	4	5	6 写経会 13時半から
7	8 読書会 13時半から	9	10 映画会 お休み	11	12	13 お盆施餓鬼法要 １０時半
14	15	16	17 映画会 お休み	18	19	20
21	22 読書会 13時半から	23	24 映画会 13時半から	25	26	27
28	29	30	31 映画会 13時半から	9月1日	2	3 写経会 13時半から

読書会
8月8日
8月22日
（火）13時半

写経会
8月6日（日）
9月3日（日）
13時半

映画会
変則日程です

狂言綺語…随喜

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

人は何かを表現したい、それを誰かに知ってもらいたいという欲求があるようで、私もクリエーティブな活動を続けてきたといえば聞こえはよいのですが、学生時代には詩の同人誌を出し劇団を主宰し会社ではCMの企画制作をしてきました。しかし創作は意欲よりも才能が必要であると気づくと、さっさと今までの創作への思いを捨て去り次の表現をまた見つけてはそれに熱中するということを繰り返して来てしまいました。まだコピーもワープロもない時代に同人誌を出すことはそれなりの覚悟が必要で、3人で6万ずつ出し合ったでしょうか（47年前の6万です！）郵送費も含めると学生の分際ではとても勇気のいることでした。それで果たして何人に届いたことか。芝居の脚本は全て手書き、照明は缶をくり抜き舞台装置はベニヤと垂木で作り上げる。時間と手間とお金と情熱がないとできないことですが、それだけでは続かないのもまた事実です。

パソコンとネットの発明は創作方法と伝達手段に革命をもたらしました。誰でも簡単に安価に多くの人に自分の思いを伝えることが可能になったのです。私はあまりの急激な技術革新に40年近い映像制作の現場で何がどう変わり可能になったかの理解を早々に断念しました。かつてはプロの技術だったカメラや編集録音機材などは誰でも操作が可能になり、制作現場がプロの聖域として存在しえなくなってしまったからです。今やPCとスマホさえあれば望めば誰でも映像を創作できます。創作を一部のプロの手から開放した意味では私たちはその技術革命のまっただ中を生きているわけです。しかしそれはあくまでも技術面からのもので、創作物は玉石混淆、ネットにはあらゆる表現が溢れています。私たちは方法と手段の革命によって創作された混沌とする表現の大海に放り出されているようなものです。それが消費のためではなく誰かに知ってもらいたいというものが見つけられ伝えられた時、技術革命は自由な表現の獲得をもたらしたと言えるでしょう。

私が毎日朝勤で読む経が2000年以上前に編まれインド、西域、中国、朝鮮を経て今、日本で読経されていることに私は何としても伝え続けたいという人々の強い意志を感じずにはいられません。最初は口伝そして書写、木版印刷、活版印刷、今ではネットを通じてモニターで経を読むこともできます。長い年月、人々のこの経を伝えたい皆に読んでもらいたい読んだ喜びを皆と共有したいとの思いが、時の壁を越え伝達技術の飛躍的な発展をもたらしたことは間違いありません。私が受け取ったその思いを、私はここで終わりにすることはできません。私もその思いを次に繋げる一人であらねばならないのです。経文や文学、美術、思想だけでなく、生きとし生けるものの営みを次に繋げるために私たちは生を授かったのです。私が「永遠のいのち」と言うときそれは生物学的な命ではなく、過去から伝えられた思いを未来へと繋いで行くことなのです。

法華経随喜功徳品第18に「五十展転随喜の功徳」という教えがあります。弥勒菩薩の「釈尊が入滅された後に、この法華経を聴聞して心から喜んで有り難いと思うならば、その人はどれほどの福徳を得るのでしょうか」という質問に対してお釈迦様は「仏の滅後に、誰でも法華経を聞いて随喜し説法の座から出て、様々な処に行って、**聞いた通りに**父母や親類や友人知人のために**力に応じて法を説いた**としよう。この人たちもこれを聞き終わって随喜の心を起こし、さらに他の所に行ってこの教えを伝えていき、次の人も聞き終わって随喜の心を起こし、このように次々と展転して第五十人目の人に至ったとしよう。この第五十番目のただ法華経の教えを聞いただけの人の功徳は、生涯にわたって広く多くの衆生に無量の財施（物の布施）や法施（教えの布施）を与えてきた大施主の功徳よりも遥かに大きいものである」お釈迦様は生涯にわたり人々にあらゆる布施を施し阿羅漢（小乗の悟り）の悟りに導いた大施主の功徳は、五十番目に法華経のわずか一偈を聞いて随喜した人の功徳の百千万億分の一にも及ばないと説いています。この教えの根底には大施主の悟り（小乗）は自分自身の完成のためだけであり、法華経は利他のために生き、他人のために実行することで自利（大乗の悟り）を得ることができる喜びがあるのです。それが50人目の人まで教えが展転する力となっているのです。教えを聞いた人がその教えを実行し人に伝えることを喜びとすることが随喜です。人に伝えることは勇気とエネルギーを要します。自分がこの教えを知ってよかった、実行してよかったという体験（随喜の実感）がこの喜びを人と分かち合い弘めたいという「願い誓い行い」になり展転するのです。

随喜功徳品には自分の随喜体験を弘めるための重要な言葉が二つあります。それは「聞いたとおりに（如其所聞）」と「力に応じた演説（随力演説）」です。自分の聞いたとおりに伝えることの困難さは伝言ゲームをしたことがある人ならば充分納得できるでしょう。聞いたことに随喜し信解し自らがそのとおりに実行しなければ、他者に自分の随喜を伝えることはできません。言葉の通りに実践したからこそ、その実践は言葉にリアリティを持たせて伝わるのです。言葉の表面を知識としてなぞるのではなく、言葉を自分の血肉とする実践と喜びがあってこそ、それは伝わります。展転する力は単に言葉を伝えているからではなく随喜を伝えているから発揮される力です。また伝える側も受け取る側もその力を超えてやりとりすることはできません。自分の能力を超えて知識で背伸びした言説には随喜が伴いません。それでは相手に理解されないことがあるでしょう。かといって適当にはしょって説くこともなりません。私の随喜を全力を尽くして説き相手に随喜の心を伝えることではじめて言葉は理解されるのです。伝え伝わるものは言葉ではなく喜びなのです。

未だに懲りずに私は伝えたい想いを、狂言綺語に綴っています。手書き、活版印刷、郵送の時代から、PCで作りネットからメールやSNSなどで広く手軽にお届けすることができるのは技術革新のおかげです。しかし手段は便利になっても伝える随喜が手軽ではあってはならないことは言うまでもありません。合掌。

琉游舎：戸井　出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319ー17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp